

第3章 後継者の覚悟、聞いてみませんか

大阪府事業承継・引継ぎ支援センター
統括責任者 兼田 亜貴



「ところで……お前、会社を継ぐ気はあるのか」
お盆で帰省していた孫たちが縁日に出かけ、家の中が静かになったとき、父親である A 社長は、息子と二人になったのを機に、以前から気になっていたことを尋ねました。
事業承継の潮目は、このような何げない家族の時間に変わることがあります。お盆やお正月は、離れて暮らす子どもや親族が久しぶりに集まり、普段は話せないことをゆっくり話せる貴重な機会です。会議室で向き合うより、夕涼みをしながら、あるいはこたつを囲みながら話すほうが、お互いの本音が自然に出てくることもあります。
「もちろん、覚悟はできている」息子さんの言葉を聞き、

A 社長は心の中でガッツポーズ。平静を装うのに苦労されたそうです。
そんな A 社長も、それまでは「息子はいるが頼りなくてねえ」「まだ30代で経験も浅いし、社長の器ではないよ」と、どこか煮え切らない様子でした。
多数の相談者への対応を通じて感じるのは、人に対する評価は、その時々感情や先入観によって大きく変わるということです。「引っ込み思案で、社長には向いていない」と聞いていた後継者に実際にお会いすると、落ち着いて自分の考えを語り、周囲への気配りもできる立派な方だった、ということがあります。
親にとって、子どもは何歳になっても子どもです。しかし、親の知らないところで経験を重ね、経営を担う覚悟を育てているかもしれません。後継者の本当の姿を知るためにも、まず対話を。周囲の評価だけで決めつけず、本人の言葉に耳を傾けることが大切です。
この夏、家族との会話の中で、会社の将来が少しでも話題に上ったでしょうか。何げなく交わした一言をそのままにせず、改めて落ち着いて話す時間をつくる。それが、事業承継を前に進める次の一歩になるかもしれません。

